鎖でドローイング

–行為から生まれる線–

東端亜紀（和歌山市立四箇郷小学校）

題材コンセプト

ジャクソン・ポロックのポウリング絵画は、粘度の高いエナメル塗料が刷毛先から飛んだ「軌跡=線が織りなされたものだ。この「行為としての絵画」は、線を生み出す強い緊張感を持続させつつ一回一回の行為と時を重ねていくことでもあったようだ。その緊張感のある線描の「行為性」を、最も簡潔に体験させるのが、本題材の目的である。

絵の具と違って、それは痕跡を残さない。細い金属の鎖は、ある程度の重さの感覚を手に与え、意外なほど大きな音をたてて板に打ち落とさされる。偶然でしか生まれない線のかたち、鎖の落とし方や力の入れ方で大きく変化する線の表情を楽しむことがまず求められる。映像として記録し、写真や動画で鑑賞することも重要である。

1．題材について

（省略：題材コンセプト参照）

2．学習目標

(1) 鎖での線動に興味を持ち楽しんで活動する。**[関心・意欲・態度]**

(2) 多様な線をつくろうと持続して活動する。**[発想・構想]**

(3) 身体と鎖を様々に工夫して多様な線をつくり出し、パフォーマンスとして表現する。**[創造的技能]**

(4) 自分や友だちの線の良さや特質を見出し、パフォーマンスを楽しむ。**[鑑賞]**

和歌山市立四箇郷小学校 4 年生（指導：東端亜希）

3．学習の流れ・指導計画

■**第一次**：いろいろな素材を投げ下ろして線をえがいてみよう。

■**第二次**：鎖で線を描こう。

■**第三次**：鑑賞。

4．指導のポイント・学習のフォーカス

自分の身長と同じ長さのくさりを使う活動に対して、はじめは戸惑う子が多かった。

中には、ボードにくさりがあたる音に驚いたり、恐がったりする子もいた。しかし徐々に行為を楽しっめるようになった。活動している子の横に立ってアドバイスをする子や、もう一度挑戦してみたいという子も出てきた。

小学 4 年生の子どもたちにとっての線のおもしろさの理解の程度を評価することがとても難しいと思う。個々の線への興味や、理解の質を丁寧に見取るために、活動→鑑賞を何度か繰り返して行うことが有効ではないかと感じている。

子どもたちがのびのびと活動を楽しむためには、ボードはなるべく大きいものの方が良い。くさりがボードを滑り、枠からはみ出してしまうことが多かったからだ。はみ出してしまうことを経験し、それを生かして力を加減したり工夫したりする方法もあるが、広いボードでのびのびとできた方が、生まれる「線」の幅も広がるのではないかと思う。

5．鑑賞と批評

和歌山市立四箇郷小学校４年生（指導：東端亜希）